

媒体名: サンパウロ新聞

日付: 2007年3月17日



澤伯中の講師のみなさん

太鼓協会 古屋技術委員長ら指導に来伯

一千人太鼓演奏を目指し

ブラジル太鼓協会(天野ヘドロ会長)は、十四日、文協ビル体育館で、百周年記念式典で行われる「千人太鼓演奏」の新曲を披露した。

「絆」と命名された新曲は、日本とブラジルの強固な結びつきを願い、小口大八日本太鼓連盟副会長が式典のために作曲した。「調和」をテーマに、各太鼓が織り成す異なるリズムをうまく用いて全体で一体感を表す曲となっている。

会場には上原幸百樹年記念協会理事長を始め関係者が出席し、十三歳から十五歳の十五人の

青年らは、「ソーレ」、「エイヤツ」と威勢のいい掛け声をかけ、筋骨隆々の腕を振り上げながら、糸乱れめ演奏を見せた。友人に誘われたのがきっかけで、和太鼓を始めて五年になる田中輝男さん(十三歳、四世)は、「週二回、二、三時間ほど練習します。百周年が楽しみです」と話した。

また、今回新曲伝授の

青年が、日本から来伯した四人の指導者が見守る中、覚えたばかりの新曲のほか二曲を演奏披露した。

ため日本から来伯した古屋邦夫日本太鼓連盟技術委員長、松枝明美日本太鼓連盟一級公認指導員、習し続ける子どもたちの影山伊作太鼓集団天邪鬼メンバー、箕輪敏幸宮崎県太鼓連合顧問は、一日十二時間もの集中指導を受けた青年らの様子を見て、二曲の壁があっても、細かいところは伝わりにくい

が、目で見て耳で聴いて感じてもらっている。休み時間も休まずに練習し続ける子どもたちの熱心さに感動した。「百周年にふさわしい素晴らしい演奏をしてほしい」、「太鼓を通して自分のアイデンティティを確立してほしい」と目を凝めていた。